造園学原論

Landscape Theory

黒田　乃生*
Nobu　KURODA

「造園学」は小野[1]が指摘したように研究対象の拡大，社会への反映という点において課題と可能性を抱えている。生態学，土木，建築，環境など多分野との連携が求められ「造園学が学際的な学問分野として拡大し」，「ランドスケープ分野自身の枠組みにとらわれない，産官学の総合的/統合的な取り組み」が必要とされている[2]。一方，造園学会，土木学会，建築学会，都市計画学会の中で造園学会は一論文あたりの引用文献数の平均は建築学会の次に多いが，造園学会自身の研究を引用している割合も，他誌に引用されている割合も最も低いという結果が小林[3]らによって明らかにされた。これは近年の「被引用件数」による定量的評価では評価が低いとも受け取れる結果であるが，実際には池邊[4]が述べているように「『地形，地質，土壌，水系，生物生態系や物質循環を見極め，その地域の人間の生活や歴史・文化を尊重し，生物と人間とが共生できる地域の計画やデザインを学ぶ学問』であり，農学や理学，工学におさまらない深みこそが，造園人の強み」であり，他の2学会に比べ独自性があることの現れであろう。いずれにせよ，研究動向をまとめることは「造園学とは何ぞや」という問いを忘れずに繰り返すことでもあり，問いそのものを継続させることが重要であると考える。

本稿ではおもに2008年以降の研究を鈴木[5]，小野[1]の枠組みに従って①概念や用語の規定・解釈・導入，②造園の手法論，③ランドスケープ遺産論，④その他に分け，細目はキーワードごとに整理した。

1．概念や用語の規定・解釈・導入

「景観」についてはあらためて用語のはじまりや概念の変遷が検討され，文化財保護法の「文化的景観」，歴史まちづくり法の「歴史的風致」は制度の成立を受けて用語の意味を改めて規定する作業が行なわれた。

（1）景観

「景観」という用語のはじまりについて，小野[6]は三好学が用いた「景観」が環境の科学的観察と美的観賞の双方を意図していたこと，1902年に三好によって初めて使用され一般語としても公教育を通じて紹介されたことなどを明らかにした。渡部[7)-9)]は三好学の景観概念および地理学で用いられた景観概念と風景概念の変遷について網羅的に整理した。

（2）文化的景観

主に地理学で用いられた従来の「文化景観」から制度によって規定された「文化的景観」へと変化したことで，新たに概念を問い直す作業が続けられた。篠原[10]は文化的景観の概念が従来の「景観」のパラダイムを「表出されたもの（景観）」から「表出するもの（営為，活動）へ」と転換させたと論じている。特集ではそれまでの文化的景観に関する研究の一覧も整理しており[11]，歴史，地理，建築，都市計画と様々な分野で文化的景観の事例研究や海外の事例紹介が行われていることがわかる。また，特集後の事例研究については本稿の「ランドスケープ遺産論」の項目で後述する。

（3）歴史的風致

「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」（「歴史まちづくり法」）の成立にともなって「歴史的風致」の概念も注目された。特集では進士[12]が「歴史的風致」を「文化財としての価値を持つ建築物，遺跡，庭園等と‐略‐伝統行事などの諸活動が一体となって醸成される好ましい雰囲気やあじわい，歴史的文化的風景」というイメージであるとしている。さらに，西村[13]は文化財，都市計画双方の制度に何が求められているかを述べ，宮城[14]は地域の歴史的なプロセス上にある現代の意味をとらえる手法を論じ，脇坂[15]，市原[16]が制度について解説した。また，平成20年度の造園学会大会ではミニフォーラムも開催された[17]。これまで，おもに「風致地区」や「森林風致[18]」などに用いられてきた「風致」という用語が「歴史的風致」へと広がった。

（4）その他‐インタープリテーション，環境思想，風土

これまで，多様な分野でのニーズの増大に伴い曖昧に用いられることが多かった「インタープリテーション」について，平松ら[19]は用語の意味を整理するとともに，自然公園，観光，環境教育，博物館，都市公園の各分野での導入と展開の経緯を示した。

*筑波大学大学院人間総合科学研究科

環境思想概念の導入に関して，関ら[20]は熊沢蕃山の自然共生思想が現在にも通じるものであることを述べた。また，西田[21]は過疎地域である越後妻有と瀬戸内海直島のアートプロジェクトを「風土性や場所の記憶を重視する人類史の風景への動き」と位置づけた。

2．造園の手法論

造園学の主要な対象のひとつである公園が「建設」から「管理」の時代へ移って20年ともいわれており[22]，デザイン，計画，管理運営の中では管理運営についての研究が多い。

（1）デザイン論

デザイン思想を扱ったものとして，若泉ら[23]は福羽逸人が園芸・造園界に海外の技術やデザイン手法を導入し，新宿御苑研究生制度によって多くの人材の育成に貢献したことを明らかにした。また，谷ら[24]は竹が描かれた山水画を4タイプに分類し，竹と空間表現の関係について明らかにした。浦崎[25, 26]は神社の空間構成と立地環境について分析した。

（2）計画論

観光地の計画論の系譜をまとめた下村[27]は，「来訪者に対する認識」，「財源と主体」，「環境との関係」の三点において変化が起こっているとしている。計画の歴史経緯を分析したものとして，国立公園指定に海中公園制度が与えた影響を論じた研究[28]，田中正造の治山治水論が植樹ボランティアへと受け継がれたことを述べた研究[29]がある。また，計画思想に言及したものとして，塚田ら[30]は本多静六と井下清の設計した敷島公園を，自然を尊重し風景を利用するという当初の計画思想とその後の変遷から再評価した。

（3）管理運営論

管理運営については企業，市民という二つの立場から特集が組まれた。企業についてはCSR（企業の社会的責任）が特集され[31, 32]，公園から里山まで造園学が対象とするものの管理への企業の貢献の事例が紹介された[33]。また，企業にとって都市緑化に関わることにどのような意義や価値があるのかも議論された[34]。2008年の研究動向から継続しているものとして，パークマネジメントが上げられる。詳細は別稿に譲るが，「市民力によるランドスケープマネジメント」の特集[35]では，里山公園などの事例が紹介された。いずれも，公園，里山など地域の環境にコミュニティや企業という主体がいかに創造的に関わるかという視点で論じられたものである。

（4）評価論

「評価」そのものを扱った研究として，屋代[36]はギブソンが提示したアフォーダンス理論が景観評価の研究に有効な問題提起となることを示した。剣持ら[37]は景観と価値観が相互に作用し，人々の働きかけで景観が変化することで価値観も変化していることを明らかにした。

経済的な評価手法は継続して試みられた。ヘドニック・アプローチによって公園や緑地の経済効果を検証したものとして，愛甲ら[38]，小林ら[39]の研究があげられる。また，原ら[40]は住宅情報誌の分析から公園が住環境の付加価値として認識されていることを明らかにした。また，舟引[41, 42]は緑地空間の価値の公表と，その確保のための政策を検討した。

その他，環境と評価に関連して，森林の主観的な評価に関して「ゆらぎ」に着目した研究[43]，空間の印象評価と光・温熱環境との関係に着目した研究[44]がある。

3．ランドスケープ遺産論

鈴木[5]が1995年に研究動向でとりあげた「ランドスケープ遺産」から15年を経て，対象は庭園や史跡から文化的景観，産業遺産へと大きく広がり，平澤[45]が指摘するように「いわゆる造園史を中心とする分野で対象としてきた遺産よりももっと広い範囲」の検討が必要とされている。2007年の特集[46]に続いて，分科会ではインベントリーづくりの現状と方向性について議論が深められた[47]。保全される対象すべてが「遺産」であるとすれば，里山，生態系など多くの研究が広義の「遺産論」といえるが，ここでは他稿との差別化を図るために文化遺産を中心に整理した。また，事例研究では「保護」「保全」の視点が考察されているものを取り上げた。

（1）保全のしくみ

制度や人のかかわりなど，保全のしくみに着目した研究として，村松ら[48]は町並み保存団体設立の動機の変遷を，社会背景を踏まえて整理し，町並み保存の動機の多様化を指摘した。また，内海ら[49, 50]は白川村の屋根葺き替えの変化から目に見えるモノだけではない文化の継承に有効な制度が必要であると指摘した。

また，マッリオ[51]はイタリアの文化的景観保護の法律と手法の変遷，宮脇[52]はイタリアの文化財と景観に関する法律「ウルバーニ法典」を紹介した。

（2）社寺・庭園

社寺地や庭園を対象にしたものとして，神林ら[53]は江戸の寺院庭園の江戸期の分布と利用，近代化以降の変容を明らかにし，残された8箇所について「宗教緑地」としての価値付けの必要性を示唆した。また，関ら[54]は岩崎小彌太邸から国際文化会館への変化にともない，施主や設計思想の相違を背景に建築と庭園の関係が変化したことを明らかにし，今後の文化財保存には変遷を踏まえた関係性も考慮することが必要であると指摘した。

（3）公園

公園に関連するものとして，岡田ら[55]は京都市における昭和初期に竣工した児童公園を「近代ランドスケープ遺産」

の視点から①地域への開放性，②ドイツ表現主義のデザイン，③軸線導入のバラエティー，④現存することという4点において評価した。西阪ら[56]は芦屋市，神戸市において1割以上の都市公園に「歴史や出来事」を伝えるものなどの地域資源が公園内で保全・活用されており，今後は多面的な活用方策の検討が必要であることを指摘し，田原ら[57]はオープンスペースに存在する地域資源の活用の必要性を示した。また，千代[58]は広島平和記念公園を対象に，観光案内と空間構成の関係の変遷を明らかにした。

（4）文化的景観

南里ら[59]は近江八幡のヨシ原の変遷から文化的景観の保全は形態そのものの維持ではなく，人とヨシ原との関係性を維持・再生することを目的とするべきであると提言した。栗田ら[60]は大分県における竹林を景観資源ととらえ，その保全のための基礎的条件である人とのかかわりから活用タイプを考察した。また，伊藤[61]は秋田県本荘市と山形県酒田市のクロマツの植え方・見え方の特性から，視認性が高い酒田市において景観計画に反映する必要性を示した。沈[62]は棚田景観の評価結果から，地域特性が現れた「美しい」棚田を「地域の名景として固定化させ，その視点場，眺望対象，視覚関係（見方）を重点的に保全」する手法を提案した。イシザワ[63]はペルーのチンチェロ村において水系が重要な構成要素であることを踏まえ保全のための提言を行ったのをはじめ，豊島ら[64]は白川村荻町の水系を，山口ら[65]は小鹿田焼の文化的景観を取り上げた。井原[66]は瀬戸内海地域の「花の景観」の変遷と現在の動きを「地域文化の継承」として位置づけることが可能であると考察した。

（5）産業遺産

平成20年度の全国大会が北海道で開催されたのに関連して，炭鉱跡地のデザインについての事例紹介と共に[67, 68]，分科会では地域再生における「ポスト・インダストリアル・ランドスケープ」デザインに関する議論があった[69]。また，岡田ら[70]はテクノスケープの研究を継続し，単純な初源的形態をプリミティブ形態として，美学を援用してその意味論的価値の検討を行なった。

事例研究として，市原ら[71]は九州の産業遺産に交通関連のものが多いことを明らかにし，青木[72]は足尾銅山の事例を扱った。森奥ら[73]は地域住民の工場に対する意識の高さが地域に対する意識の高さに繋がっていることを明らかにした。

（6）歴史的建造物，伝統的建造物群保存地区

歴史的建造物に関連して清野ら[74, 75]は歴史的建造物の敷地の面積と用途の変化から敷地のコントロールによる歴史的建造物保護の可能性を示唆した。北原ら[76]は妻籠宿を事例に伝統的建造物群保存地区の保全に水路網と庭池を含めた水のネットワークが重要な要素であることを明らかにした。

（7）その他 - 負の遺産，擬石・擬木，森林

清水[77]は沖縄の戦争遺跡を対象に戦争遺跡を歴史的環境保全の課題と区別することなく，地域の文化という視点から複合的に捉えなおす必要性を述べた。粟野[78]は擬石・擬木の導入と利用の系譜を整理し，近代庭園の評価指標として提示した。また，黒田[79]は世界文化遺産地域における森林管理の重要性を指摘した。

4．その他

（1）自然・みどり論

みどり論としては民有地の緑をどのように保全創出するかという視点で特集が組まれた[80]。「管理運営論」で述べたように公共の「公園緑地」は整備からマネジメントへと視点が変化した一方で「民有地の緑」は保全と創出が必要とされており，都市，農村，企業，個人などさまざまな民有地における「緑」の重要性が検証された。

（2）教育・職能論

平成20年度には「地球環境時代の造園家の責務を考える」というタイトルで分科会が開催され，IFLAへの積極的な参加や多様な人材育成の必要性が示された[81]。CPDについては引き続き課題と解決策が検討された[82]。そのほか，木下[83]はJABEE認定制度が学生にとっては技術士への近道，実務レベルの要求の取得などの利点がある一方，より広くプログラムそのものが社会に浸透する必要があると述べ，伊東[84]は生涯学習の事例を紹介した。神藤ら[85]は2級造園技能士検定の課題の把握から今後の実習教育のための知見を示した。

職能という視点では，小泉ら[86, 87]は明治期から現在までの造園工事業の業態と業容の変遷を整理し，明治期に始まった枯損木植替え補償がその後制度として展開した過程を明らかにした。田中ら[88, 89]は造園工事業についての統計から市場の縮小が工事高の減少や一社あたりの企業規模の縮小に繋がっていることなどから，今後は「環境の時代という社会的ニーズに対し，造園工事業が産業としてのアイデンティティを持ちながら活動領域を拡大」するべきであると警鐘を鳴らし，また「工業化により破壊された自然の生態系を修復する新たな事業展開の可能性」を示した。

注

1）小野良平（2008）：造園学原論：ラ研 72(1)，3-9
2）池尻あき子（2009）：地球環境時代の造園家の責務を考える－国際的な視座・多様な視点から－：ラ研 72(4)，405-406
3）小林隆史・雨宮護・大澤義明・腰塚武志（2008）：都市計画論文集の引用文献分析--論文集間比較と経年比較：都計 43(3)，115-120
4）池邊このみ（2008）：CSRにより推進される持続可能な社会に向けた技術－ランドスケープ領域のさらなる発展に向けて：ラ研 72(3)，254-257
5）鈴木誠（1995）：造園学原論：ラ研 58(3)，264-268
6）小野良平（2008）：三好学による用語「景観」の意味および導入意図：ラ研 71(5)，433-438
7）渡部章郎（2009）：地理学系分野における景観概念の変遷：東京農大農学集報 54(1)，20-27
8）渡部章郎：三好学を起点とする「景観」および「景観類義語」の概念と展開

に関する研究：都市計画 44(1)，75-80
9）渡部達郎（2009）：景観概念の変遷に関する研究について：国立公園 679，17-20
10）篠原修(2009)：時代を画す文化的景観の概念とその展開：ラ研 73(1)，2-5
11）日本造園学会編集委員会(2009)：文化的景観に関する参考文献等一覧及び参考資料：ラ研 73(1)，36-40
12）進士五十八（2008）：歴史的風致の概念とそのランドスケープ的意義：ラ研 72(2)，150-153
13）西村幸夫（2008）文化遺産と歴史的環境の再生に向けての計画論の現状と今後：ラ研 72(2)，154-157
14）宮城俊作(2008)：歴史的風致をめぐるリテラシーの継承とプロセスの表現：ラ研 72(2)，158-161
15）脇坂隆一（2008）：地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）について：ラ研 72(2)，182-186
16）市原富士夫（2008）：地域における文化財の総合的把握と保存・活用について：ラ研 72(2)，187-191
17）小野良平（2008）：まちづくりの取組みと「歴史的風致」：ラ研 72(3)，300-301
18）「森林風致」については清水裕子による一連の論説がある。（清水裕子（2008-2009）：連載"風致林施業"を語る技術者の輪：森林技術 800～811）
19）平松玲治・堀江典子（2009）：国営公園におけるインタープリテーションプログラムの導入と展開に関する考察：ラ研 72(5)，585-590
20）関 智子・進士 五十八（2009）：熊沢蕃山の環境保全論が岡山藩における山林保護政策に与えた影響について：ラ研 72(5)，777-780
21）西田正憲（2008）：過疎地域の越後妻有と瀬戸内直島における現代アートの特質に関する風景論的考察：ラ研 71(5)，785-790
22）糞茂寿太郎（2009）：公園経営の歴史と展望：公緑 70，4-7
23）若泉悠・鈴木誠(2008)：福羽逸人が園芸・造園界に与えた影響 ：ラ研 71(5)，469-474
24）谷光燦・田代順孝・木下剛・章俊華（2008）：竹が描かれた山水画における空間の表現に関する研究：ラ研 71(5)，603-606
25）浦崎真一（2008）：奈良県の旧県社における不整形空間構成と立地環境の関係に関する研究：ラ研 71(5)，779-784
26）浦崎真一（2009）：奈良県の旧官幣大社における立地環境と空間構成の関係：ラ研 72(5)，787-792
27）下村彰男（2009）：観光地計画論の系譜：ラ研 73(2)，86-88
28）佐山浩（2009）足摺宇和海国立公園指定の経緯と背景：ラ研 72(5)，451-454
29）中村愛子・下村彰男（2009）：足尾砂防地区植林事業の植林ボランティアにおける計画思想に関する研究：ラ研 72(5)，455-458
30）塚田伸也・森田哲夫・湯沢昭（2009）：利用と空間構成の移り変わりから捉えた敷島公園計画案の評価に関する基礎的考察，ラ研 72(5)，849-854
31）特集（2008）：CSR がつくる風景：ラ研 72(3)，253-291
32）特集（2008）：企業の社会貢献と緑のまちづくり：公緑 68
33）岸本幸子（2008）：CSR とみどりの街づくり：ラ研 72(3)，262-267
34）特集（2009）：企業と都市緑化：都市緑化技術 74
35）特集（2009）：市民力によるランドスケープマネジメント：ラ研 73(3)，181-219
36）屋代雅充（2009）：景観評価におけるアフォーダンス理論の有用性に関する考察：ラ研 72(5)，956-965
37）剣持智美・斎藤馨（2008）：環境価値観の類型と日常景観評価の関係に関する考察：ラ研 71(5)，833-836
38）愛甲哲也・崎山愛子・庄子康（2008）：ヘドニック法による住宅地の価格形成における公園緑地の効果に関する研究 71(5)，727-730
39）小林優介・安岡善文・沢田治雄（2009）：東京南西部における公園・運動場等と樹林地による外部経済効果の評価：ラ研 72(5)，763-766
40）菅原晋・伊藤弘・小野良平・下村彰男（2008）：住宅情報誌にみる公園のアピールポイントと住宅の価格・環境条件との関連：ラ研 71(5)，611-614
41）舟引敏明（2009）：緑地空間の価値の公表による緑地保全制度の改善に関する考察--緑地空間の価値及び関係情報の公表による緑地保全に対する合理的行動の期待について：都計 44(3)，25-30
42）舟引敏明（2009）：わが国の緑地空間の確保施策についての費用の面からの考察：ラ研 72(5)，793-798
43）藤澤翠・高山範理・小山泰弘・加藤正人（2008）：針葉樹人工林を対象とした林内照度のゆらぎと男子学生の心理的評価との関係：ラ研 71(5)，709-712
44）紀谷珠美・高山範理・朴範鎮・古谷勝則・香川隆英（2008）：森林散策路の光・温熱環境と森林浴における主観評価との関係：ラ研 71(5)，713-716
45）平澤毅（2009）：造園遺産と目録作成の方向性について：平成造園学会全国大会分科会講演集，38-43
46）特集（2007）：近代ランドスケープ遺産の価値とその保全：ラ研 70(4)，255-291
47）赤坂信・池尻あき子・木下剛・佐々木邦博（2009）：造園遺産インベントリーづくりの方向を考える～地域活動から全国展開に向けて～：ラ研 73(3)，232-233
48）村松保枝・赤坂信（2009）：全国町並み保存連盟加盟団体の活動にみる保存の動機の変遷：ラ研 72(5)，459-464
49）内海美佳・羽生冬佳・黒田乃生（2008）：白川村荻町における茅屋根葺き替えの現状と保存に関する考察：ラ研 71(5)，697-700
50）内海美佳・黒田乃生（2009）：白川村の「結い」と「屋根葺き替え」の変遷に関する研究：ラ研 72(5)，665-668
51）Dario Paolucci Matteo（2008）法律システムからみたイタリアにおける文化的景観の保存：都計 43(3)，529-534
52）宮脇勝（2009）：イタリアの文化財と景観の法典(ウルバーニ法典)の展開とその景観計画と景観アセスメントの研究--ウルバーニ法典（2008 年改正）にみる景観の定義，権限，計画，景観許認可に着目して：都計 44(3)，421-426
53）神林翠・雨宮護・横張真・藤川昌樹（2008）：江戸の寺院庭園の利用実態と近代化による変容過程：ラ研 71(5)，463-468
54）関智美・石川幹子・大澤啓志（2008）：岩崎小彌太邸から国際文化会館への変遷を通した建築と庭園の関係に関する研究：ラ研 71(5)，457-462
55）岡田昌彰・薮内慎太郎（2008）：昭和初期に竣工した京都児童公園の空間構造に関する研究：ラ研 71(5)，663-668
56）西阪玲子・田原直樹・上甫木昭春（2008）：都市公園における地域資源の存在状況と活用実態に関する研究：ラ研 71(5)，615-618
57）田原直樹・宮地将行・上甫木昭春（2009）：公的オープンスペースの種類及び立地に着目した地域資源の存在状況に関する研究：ラ研 72(5)，697-700
58）千代章一郎（2009）広島平和記念公園案内における「平和公園」の変容：都計 44(1)，56-61
59）南里美緒・横張真・落合基継（2009）：近江八幡の水郷景観におけるヨシ原の変遷とその文化的景観としての保全策：ラ研 72(5)，731-734
60）栗田融・包清博之（2009）：竹林活用を基調とした地域景観の保全に資する地域類型に関する基礎的研究：ラ研 72(5)，735-740
61）伊藤弘（2008）：本荘と酒田における市街地での神社の植栽を中心としたクロマツの見え方の差異：ラ研 71(5)，679-688
62）沈悦（2008）：兵庫県北淡路地域における棚田景観の視覚特性について：ラ研 71(5)，701-704
63）イシザワマヤ・石川幹子・福井弘道（2009）：アンデス農村地域の文化的景観の変容－ペルー共和国インカの聖なる谷のチンチェロ村を事例として：都計 44(3)，427-432
64）豊島久乃・斎藤英俊（2009）：水環境への適応とその持続的活用形態からみた山村集落の文化的景観評価－：岐阜県大野郡白川村荻町合掌造り集落の例：建計 642，1905-1910
65）山口知恵・松本将一郎・西山徳明（2009）：小鹿田焼の里皿山における伝統的な生業の持続と文化的景観の保全に関する研究：建計 644，2215-2222
66）井原縁（2008）：瀬戸内海地域における「花の景観」づくりの文化的価値に関する史的考察：ラ研 71(5)，483-486
67）小林昭裕（2009）：北海道空知地域を事例とした景観を手掛かりとする旧産炭地域の地域再生への提案：都計 44(3)，415-420
68）小林昭裕（2008）：アートによる炭鉱遺産空間と地域再生：ラ研 72(3)，306-307
69）木下剛・高橋靖一郎・石川初（2009）：ラ研 72(4)，411-412
70）岡田昌彰・北川慎也（2008）：テクノスケープ・レトリック論としてのプリミティブ形態の形成景観に関する研究：ラ研，909-912
71）市原猛志・趙世晨（2008）：九州地方の近代産業遺産の現存状況及びその特徴に関する研究：建計 634，2697-2702
72）青木達也・永井護（2008）：産業遺産としての足尾銅山宇都野火薬庫の特徴--日本の産業史と地域史の観点から都計 43(3)，589-594
73）森奥悠人・松村暢彦・鳴海邦碩（2008）：地域資源としての工場に対する住民意識構造に関する研究 ：都計 43(3)，481-486
74）清野隆・土肥真人・杉田早苗・丸谷耕太（2008）：東京都の歴史的建造物とその敷地用途の関係に関する研究：ラ研 71(5)，737-740
75）清野隆（2009）：川越一番街における歴史的環境の変容に関する研究--歴史的建造物の保全にみる敷地用途と町並みの変化に着目して：都計 44(3)，385-390
76）北原礼文・佐々木邦博・上原三知（2009）：妻籠宿における地形からみた水路網・土地利用と住民の保全意識：ラ研 72(5)，661-664
77）清水肇・高橋弘治（2009）：歴史的環境における「負の遺産」のあり方について－沖縄の戦争遺跡の実態と可能性を通じた検討：都計 43(3)，835-840
78）栗野隆（2009）：擬石・擬木の造園的利用の系譜からみた琴ノ浦温山荘園の造園史的位置づけについて：ラ研 72(5)，439-442
79）黒田乃生（2009）：日本の世界文化遺産における森林の現状に関する考察：ラ研 72(5)，645-650
80）特集：市街地における民地の緑の価値と効用：ラ研 73(4)，259-301
81）前掲 2)
82）三島孔明（2008）：造園 CPD と多様な学習機会の創出：ラ研 298-299
83）木下剛（2009）：JABEE 認定制度を活用した緑地環境学の学習と教育：都市緑化技術 75，22-23
84）伊藤豊（2009）：東京農業大学における農業・園芸に関する生涯学習：都市緑化技術 75，23-24
85）神藤正人・内田均・入江彰昭・見留秀明（2009）：2 級造園技能士検定課題における作業工程の分析：ラ研 72(5)，475-478
86）小泉直介・進士五十八（2008）：わが国造園工事業の近代化プロセスに関する考察：ラ研 71(5)，913-920
87）小泉直介・進士五十八（2009）：枯損木植替え補償制度の公共造園工事における展開とその合理性に関する考察：ラ研 72(5)，922-927
88）田中史郎・中村卷攻・齋藤雪彦・藤井英二郎・鳥井幸恵・近江屋一朗（2008）：統計資料からみた造園工事業の企業数，完成工事高，従事者数，付加価値額の推移に関する考察：ラ研 71(5)，487-492
89）田中史郎・齋藤雪彦・藤井英二郎・鳥井幸恵・近江屋一朗（2009）：バブル経済崩壊後の市場縮小時代における造園業の実態と課題：ラ研 72(5)，479-484